

佛蘭西書巡覧 6

平山 弓月

フランス啓蒙思想のピラミッドとして、また誇張に過ぎる表現ではあるが、フランス革命を勃発せしめた弾丸の一つとして、「百科全書」の名を知らぬものはない。

桑原武夫



十八世紀フランス研究において、共同研究を主宰するなど指導的な役割を果たした桑原武夫は『フランス百科全書の研究』（岩波書店刊、1954）の冒頭に上記の文章を書き綴ります。しかしこの指摘には前段があるのです。曰く、「歴史の上に、その名のみが高くして、実はほとんど読まれない名著と言うものは少なくないが、ディドロ＝ダランベールの『百科全書』こそ、そのもっとも著しい例の一つであろう」。読まれない本は不幸であり、極論すれば存在していないも同然なのです。

本学の図書館は、幸いにも初版の全35巻完全揃と2種類の後刊本を所蔵しており、読者を待っているのです。今回と次回の2回に亘ってこの『百科全書』を紹介しようと思います。

日本では『百科全書』と呼び習わしていますが、そのフランス語名称は《ENCYCLOPÉDIE, ou DICTIONNAIRE RAISONNÉ DES SCIENCES, DES ARTS ET DES MÉTIERS》といい、訳せば『百科全書、または科学、技術、工芸に関する合理的辞典』となるでしょう。責任編集者としては、ディドロ Denis DIDEROT (1713-84) とダランベール Jean Le Rond d' ALEMBERT (1717-83) の、啓蒙思想を代表する二人が当たりましたが、さまざまな項目の執筆や図版製作に各分野の専門家が260人余り集められました。私たちにも親しいルッソー Jean-Jacques Rousseau (1712-78)、ヴォルテール Voltaire (1694-1778)、モンテスキュー Charles DE SECONDAT, baron DE LA BRÉDE et DE MONTESQUIEU (1689-1755) の名前も見えます。

この巨大な知的モニュメントの構成は、六万にも及ぶ項目を擁する本文が十七巻、これに四巻の補遺があり、三千点もの図版の収録に十一巻をあてさらに図版補遺が一巻つき、索引に二巻を費やすといった膨大のものなのです。これが十八世紀半ばの1751年から1772年にかけて印行出版されたのですから、偉業といわざるを得ないのではないのでしょうか。ちなみにこの時期は、日本では江戸中期にあたり、平賀源内や上田秋成、賀茂真淵といった人たちが個々に仕事をしていました。内容は別にして、規模から言うととても太刀打ちできるものではありません。

『百科全書』のもっとも特徴的な点は、図版による説明でしょう。精密精巧な銅版画で、「天然資源の開発」「文化」「諸科学(動植物、地学、医学、天文学など)」「技術」「社会」と分けてさまざまな項目を図解説明しています。例えば「製本屋の仕事場」を見ると、図版上部は仕事場の全景が職人たちの姿とともに描き出され、その下部に製本に使われる諸道具を図解するという体裁になっています。文章で読むだけでなく、こうした精巧な銅版画が、事物の理解のためにどれほど有効かは容易にわかるでしょう。それが詳細を極めたものならばなおさらです。中には五十点以上の美しい図版を駆使して解説している項目もあります。

しかしこの比類ない仕事の完成は困難をとまなうものでした。当時のフランスでは、出版には国家からの許可が必要でした。当初は許可を得て出されていたのですが、新しい考えは常に反発攻撃を受けるもので、出版途中で許可が取り消されてしまったのです。八巻目以降は、発行地を国外に移した体を装って完結させたのでした。

次回は本文の項目をしてみる予定です。

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)